
紫炎の魔竜

ゆたかざき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紫炎の魔竜

【Nコード】

N4420L

【作者名】

ゆたかざき

【あらすじ】

とある冒険者であった主人公は、人々を苦しめていた竜族が一体【紫炎の魔竜】と対決する。互いに退かぬ勝負の末、力の殆どを使い尽くした主人公は最後の力を振り絞り魔竜へと斬りかかる――。次に目覚めた時、彼は何かがおかしいことに気がついた。爪が。鱗が。翼が。彼の体にはあった。そう、彼は【紫炎の魔竜】の体に、その精神が乗り移ってしまったのだ――。元人間の竜と、しもべの飛竜を送るファンタジックコメディ(?)

第1章 魔竜目覚める

「……さま！ 起きてくだ、せ！ 起き、……スィーピュア様！」

ガンガンガンガンと、銅鑼を鳴らしたような大きい声が、頭の中で鳴り響いた。

気持ち良く寝ている俺を起こすために怒鳴っているのだろう。だが、わざわざ朝に弱い俺のことを起こしに来てくれる者などいないと思うのだが。

「スィーピュア様！ ……おかしいですわね、普段ならば『黙れこのアホ飛竜が』と仰って折檻してくださるのに」

頭の中で反響しているのは、まだ若そうな女の子の声だった。甲高い声は実に可愛らしい。口調がどこなくお嬢様チックなところとかは少し気になるが。

「スィーピュア様！ そろそろお目覚めになつては如何です！ スィーピュア様！」
「……ん、うう……」

前言撤回。確かに可愛らしい声ではあるのだが、いい加減しつこい。

俺は寝たい時に寝て起きたい時に起きる生活を送ってきた。それがこの世界での俺の過ごし方だし、文句を言う輩なんていなかったはずだ。

……ん？ 一体俺はどうして寝ているんだ？
俺の記憶が正しければ、ついさっきまで、俺は人々を苦しめていた竜族が一体【紫炎の魔竜】と一対一で戦っていたはずなのだが。

お互いに一步も譲らない戦いの中、俺と魔竜は満身創痍で、それでも自身の矜持のために剣とその牙を振るった。

人よりも高い叡智を持つ紫炎の魔竜と、人の中でも選ばれた力を持っていた俺は、互いのプライドをかけて激しくぶつかった。

幾度も剣と牙を打ち合わせていく内に、俺の体内に蓄積した魔力は殆ど切れ、魔竜も空へと舞い上がるための翼を切り落とされた。

どちらも絶体絶命というギリギリの勝負の中、最後の賭けに出た俺は、ほんの少しだけ残っていた魔力を剣に込め、魔竜の弱点と謳われる角目掛けて跳躍した。

角さえ折ってしまえば、竜の力は激減する。まだ、勝機が見えると考えたのだ。

俺の狙いを理解したであろう魔竜もまた、自身の名にも冠する最大の武器、紫炎をその口から噴き出した。

全てを焼き尽くす炎に対し、俺はそれを防ぐ手立てなど持つてはいない。

高貴なる紫炎にその身を焼かれつつも、だが俺は自分が勇者であるという誇りの元に剣を握りしめ、そしてそのまま魔竜の角へと剣を振り下ろし――、

「うおおおおおおおおおっ！」
「ガアアアアアアアアアアッ！」

――振り下ろして、どうなったんだ……？

「スイーピュア様！ やっとお目覚めですね！」
「……んあ？」

知らない内に、俺は呟いていたのだろうか。
俺の声を耳ざとく聞き取ったのだろっ、キーキーと甲高い声が頭蓋の中に反響する。

しかしまあもう少しトーンを落とせないのかこのガキンチョは。
俺はしかめ面を見せようとして、どうにも顔の感覚が妙なことに気がついた。

何というか、表情筋が動かない。思うように表情を作れない。
長い間笑わないせいで、笑顔が作れないのと同じような……。

……いや、そうじゃない。

そもそもにして顔の作りが全く違うような気がする。

人の顔とは違う顔が、俺の首の上に乗っかっている……？

嫌な予感に背中を粟立てつつも、俺はゆっくりとその眼を開いた。

「……？」

俺の記憶していた、人間の視野とは全く違う世界がそこに広がっていた。

視野は広く、自身の背後すらその視界に入り込んでくる。どういうことなのか。

この世界ではもはや当たり前のことなのかも知れないが、俺は最近変なことに巻き込まれまくりな気がする。

やれやれだ。俺はため息を吐こうとして、

「……え」

ため息が吐けないことに気がついた。
むしろ、息を吸えない。息を吐けない。

何が起こっているんだ？ 落ち着け、よく考えろ。

呼吸が出来ないというわけではない。今現に俺は物を考えられている。

頭に酸素が回っていない限り、こんな芸当、人間には出来ないはずだ。

そこまで考えて、二度目の、ぞわりとした感覚が背中を這いずり上がっていった。

人間には出来ない事？ ではもし、今の俺が人間ではないのだとしたら？

肺ではなくエラで呼吸するようになってしまった、とか？

世界を旅する孤高の冒険者から一転、エラ呼吸のデビルフロッグに格下げですか？

一体どんな輪廻転生を経た末にそんなことになってしまうのか。そもそも魔物に成り下がるってどういう事だ。

うがああああああ、と心の内で叫んで、俺は自分の頭を抱えようとしたが、

「……う」

届かなかった。俺の腕は、俺の頭に、届かない。

いよいよもって何が起こっているのかわけがわからない。

自分の頭を抱えることが出来ないまでに、俺の体は縮んでしまったのだらうか。

変貌してしまった自分の体を見るのは少し恐ろしくて、俺は恐る、ゆっくりと、その手を目の前へと持っていく。

「……！」

しっかりと、視界の中心に捉えた自分の手を見て、俺は思わず息が止まるかと思ってしまった。

俺の、腕は、人の物とは、大きく、かけ離れた、モノ、だった。

闇色の、鋭利な爪が四本、鈍く光る。

全てを斬り裂く漆黒の爪は、獲物を求めてギラリと輝いているようだ。

肌色の、血の通っていたはずの俺の手は、黒く鈍く光を反射する鱗に覆われていた。

全てを弾き、防いでしまうのではないかと思わせる頑強な鱗。身を守るため、発達した器官。

鱗は、人についていただろうか。この爪は、人のモノか？

否。

答えは否だ。

ゆつくりと、俺はその視線を、手からその先へと降ろしていく。

人のモノとは思えない大きさの手、そして爪。

その先には、胸がある。だが人とは比べものにならないほど巨大な、胸。

俺の全身は、手を覆うものと同様の黒光りする鱗に覆われていた。今更気がついたが、背中が重く、少しズキズキと痛んだ。

首を動かす。動かした首ですら、もはや人間のモノでないことは明白だった。

人間の首は、普通ここまで動きはしないから。

内心で叫び出したい感情を押し殺しながら、俺は何がどうなっているのかを把握するため、それを見た。

背中から生やされた、巨大な翼。

俺の体で唯一、鱗で覆われてはいない、漆黒の翼。

空へ舞い上がるためのモノなのだろう。二枚の漆黒が、そこにはある。

そしてそれは、その翼は、斬り裂かれていて。

赤黒い血を流しながら、今にも千切れそうな様相を見せていた。

「う、うあ……」

あの、剣筋を。

見間違えるはずもない。

だって、何度も何度も目にしてきた剣筋だから。

こんな世界に飛ばされても、生きるために、必死に磨いたモノだから。

いつか、自分を救ってくれた人に恩を返せるように。

そのただけに磨き上げた、俺の剣技。

それを、どうして見間違えようか。

「うああああああああああああああっ！」

俺は絶叫した。

俺は、俺に傷をつけられた。

違う。俺に、傷をつけられていた。

俺は。俺は、オレは。

俺は、竜に。

俺の記憶にある、最強にして最大、そして最後の敵、

【紫炎の魔竜】になっていた。

第2章 魔竜出逢う

世界が揺れる、世界が震える、世界が痺れる。

俺の咆吼に、世界が揺れた。大気が震えた。巨躯が痺れた。

もはや人の声ではない、醜惡な叫び声に、俺はますますその声を大きく上げていく。

喉の奥から、この直視しがたい現実に対しての怨嗟の声を上げることが如く。

「グオオオオオオオオオオッ！」

狂ったように、俺は腕を振るった。

漆黒の爪が、すぐ側にあった岩を斬り裂く。

転がった巨体が、細切れになった岩を潰す。

何が何だかわからなくて、でも少しだけ理解できてしまうが故に、俺は暴れ回った。

紫炎の魔竜と化してしまった、元人間の自分。またもう一度眠りにつけば、元の世界が待っているのではないか。

エレナが、その柔らかな微笑みを俺に向けてくれるのではないかしら。

一縷の希望を胸に、それ故に叫ぶことはやめられなくて、俺はとにかく周りの物に当たり散らかした。

紫炎の魔竜が巣くっていたのは、大陸の端に位置する【魔竜の玉座】と呼ばれた山だった。

霧に囲まれた【魔の森】を抜けた先に位置する岩山で、邪惡なる竜の玉座にはこれほど似合う場所もあるまいと思えるほどの、枯れ

果てた山だ。

ごつごつとした道を上った末に見えてくるのは、魔竜を屠らんと玉座へ向かい、そして敗北した者たちの末路。

男の骨、女の骨、老人の骨、若者の骨、果ては子供の骨まで、寒々しい山肌の上に、それらはただ乱雑に投げ捨てられていた。

魔竜に敗北し、そしてその腹を満たす餌となった冒険者か。あるいは、魔竜への贄として捧げられた憐れな民達か。

どちらでも構わない。俺は、志半ばで果ててしまった死者に心で黙祷を捧げ、そして彼らから笑みを奪い、命すら奪った魔竜を屠ることに命を賭すつもりだった。

それが、彼らへの一番の手向けになるはずだから。

そうして俺が辿り着いたのが、魔竜の玉座の頂上だった。

視線の先には、紫炎が揺らめく巨大な燭台に囲まれた岩の玉座に、ゆったりと寝そべる巨大な竜。

二対の禍々しい角。黒き翼、黒き鱗、黒き爪。漆黒でその身を覆い、高貴なる紫色の魔眼ししよくを持つ人の敵。

竜族位階第二位【紫炎の魔竜】

紫色の焰で、あらゆる物を焼き尽くすとされる、人に仇なす最強最悪の竜だった。

「……」

竜は、人語を解すと言われている。

だが、解するだけだ。自分たちよりも劣る人間たちの言語を使用するつもりは毛頭無いのだという。

魔竜もそれは変わらないようで——むしろ、位階第二位の時点で推して知るべきか——その巨大な眼で俺を一瞥し、ゆったりとその体を起こした。

贅ではないと判断したのだろう。

——自身の力量すら判断できない、阿呆な人間めが。四本足で立ち上がり、そして俺を見つめる魔竜の瞳は、そう語っているように思えた。

圧倒的な威圧感が、俺の全身を打つ。地を踏みならし、自身の力を鼓舞するが如く、魔竜はその口を大きく開ける。

規則正しく並ぶ、これまでに幾人もの人々を噛み砕き、飲み込んできたであろう牙が視界に入った。

——我を畏れぬか、矮小なる人間よ。

小馬鹿にしたような、魔竜の声が聞こえた気がした。

「誰が畏れるもんかよ……。守りたい物がある限り、俺に恐怖はない！」

背中の剣帯に収まっていた、愛用の両手剣を引き抜き、構える。腰を落とし、剣先に魔竜の顎あごを見据え、俺は挑発するような笑みを見せた。

「さあ来いよトカゲ野郎。翹たかぶった斬って、地面這いずり回ることしかできなくさせてやる！」

俺の侮辱を理解したのだろう。更に大きく口を開き、魔竜が吠えた。

その咆吼は天を震わせ、地を揺らし、そして俺の全身を打った。世界の理からして、圧倒的に人間よりも高位にある竜。

彼らから見てちっぽけな、それこそ石ころと変わらない存在である人間からの侮辱は許せないことなのだろう。

魔竜が爪を見せ、牙を光らせ、翼を広げる。その姿は、敵ながら美しいと感嘆せざるを得ない物であった。

「グオオオオオオオオオオオオッ！」

「……行くぜ、魔竜——」

——俺は、エレナをお前の贄になんかさせない！

言葉ではない言葉をその口から漏らしながら、俺は転がった。

どうしてこんなことになってしまったんだ！

何故、俺が魔竜にならねばならない！

どうして、どうして、どうして！

あまりにも理不尽なこの現実。俺にはどうしようもないこの事実
に、絶望の影を見た。

エレナは、今の俺の姿を見て何というのだろう。

彼女は紫炎の魔竜に捧げられる生け贄の少女が一人だった。

この変な世界に飛ばされてきた俺を助けてくれたのがエレナで、

俺はエレナを守るために世界を旅し、力を磨き、そして彼女の幸福

のために、俺は魔竜を屠ると決めたのに。

こんな、俺が、俺が魔竜になってしまったなんて……。

彼女が聞いたら、何という？ 信じてくれるのか？

魔竜になってしまったと話すのか？

言葉も通じないのに、何を伝える？ どうやって伝える？

そもそも、彼女に会えるのか……？

考えれば考えるだけ、選択肢はどんどんと塞がっていく。

希望の詰まっている箱に、蓋を閉めていくように、俺に残された

光が、潰えていく。

残るのは漆黒。闇、光も何も無い、ただ、竜として生きるだけの
人生……。

「ウ、グ、オオオッ……ウオオオオオオオオオオ！」

人の言葉を叫びたくても、今の俺にそれは出来ない。

その事が、俺を更に絶望の淵へと追いやっていく。

ああ、どうして！ 何故！ 俺が！ このような目にあわねばならない！

叫ぶ！ 俺は叫んだ！ だがその口から発せられるのは、ただの唸り声、竜の雄叫びだ！

俺は、一体どうすればいいと言っただ！

「——スィーピュア様！ 落ち着かれています！ スィーピュア様！」

「……あ、う？」

その時だった。俺の叫び声の合間に、あの小さく甲高い声が聞こえてくる。

俺は絶望に押しつぶされそうになる気持ちをどうにか落ち着けて、声の主を捜した。

人間の時よりも幾分か広がったその視界に映ったのは、魔竜を二回りほど小さくし、パタパタとその翼を忙しく動かしながら宙に浮かぶ、青色の竜だった。

あのタイプは、飛竜だ。空を飛ぶことを何よりの楽しみとする小型の竜で、人に害を加えることはあまりない。

そんな飛竜が、何故魔竜の住処に……？ そしてスィーピュアとは……？

湧き上がる疑問は、俺の心を覆っていた絶望を、少しだけ忘れさせてくれた。

「ふう……。わたくし危うく潰されてしまうものかと思ってしまいましたわ」

「……」

「珍しくお目覚めになるのも遅いようでしたし……。わたくし少々心配ですわ」

青い飛竜は、感情を露わにその口を開いた。

いや、開いたというのは語弊があるかも知れない。

飛竜はその顎を動かしているわけではないのだ。

頭の中に、飛竜の言葉が流れ込んでくると言っただ方が正しい。

きっとこれは、竜族のみ扱えるテレパシーのようなものなのだろう。

俺は、まずこの飛竜とコミュニケーションを取ること、絶望的な現状から脱するべく案を練ることに決めた。

「……あ、あー。あー。聞こえる？」

「勿論聞こえますわスイーピュア様！ あなた様のお声が聞こえないなんて事があるはずありませんもの！」

頭の中で、会話したいと願う目の前の飛竜のことを思い浮かべ、言葉を思い浮かべる。

竜語じゃないといけないとか、そういうわけではないらしく、難なく会話は成立できた。

次に聞きたいのは、【スイーピュア】という単語が俺を指しているのか否かということだ。

「……その、スイーピュアってのは、俺の名前？」

「スイーピュア様だったら一体何を仰って……当然のことですわ！」

……ってまさかそんなことをお忘れに！？

昨日の馬鹿人間との戦いで疲れていらっやいますの？ ……ま、まさか記憶喪失！？

と、いうことはもしかして合法的にスイーピュア様と既成事実を作ってしまうこともでき……きゃあっ！」

「ちょ、ちょっと待ってくれ……、そんなにテンションを上げられても」

妙にテンションの高い飛竜に、俺は毒気を抜かれてしまう。

聞きたいことはたくさんあるのだが、果たしてこれでまともな解答が返ってくるのやら……。

「な、なんだか今日のスイーピュア様は妙にわたくしに優しいですわ！……折檻がないのが少々物足りない気もしますが、でも全然問題ナツシング！

もしかしてついにスイーピュア様にもデレ期が！？不肖、ルウルヴィルウ、激しく感激ですわ！

ついにわたくしの努力が実りましたのね！もう感涙の涙を流さないわけにはいきませんことよ！」

「あーもうちょっと黙ってくれ頼む」

げしり、と爪を振るうと、飛竜はあえなく地に落ちた。

い、一応手加減したつもりだから大事にはならないはずだしそもそも相手は竜というか俺も竜だからもしかして規格外の力を持っているとかで大変なんじゃ……。

「あぁん、もうこれが無くては生きている気にはなりませんわぁ…

…」

などと考えていたが、脳内に響いた妙に艶めかしい飛竜の声に、俺はもう少し強くしても良かったかも知れないと思ってしまった。

「なあ、君の名前を覚えてくれないか？」

「へっ！？ま、まさかわたくしのことをお忘れになったと仰いますの……？」

「あー、いやー、うーん、まあそういうことかなあ」

「わたくしはルウルヴィルウ。あなた様のしもべではありませんか……。うう、悲しいです……」

なるほど、飛竜の名はルウルヴィルウ、か。竜族ってのはみんな変な名前をつけたがるものなのだろうか。

スィーピュアという魔竜の名前だって呼びにくいことこの上ないし、この飛竜に至っては同じような音が何個も続く。

「じゃあ、えと、ルウルヴィルウ。少し君に話しておきたいことがあるんだ」

「まあ、改まって何ですか？ わたくしあなた様のためならばこの身いつでも投げ出す覚悟ですわよ。」

……それにしても、なんだか口調も普段のスィーピュア様とは思えない気もしますが……、まあ気のせいですわよね！」

気のせいじゃないと思うが……、まあ今はそんなことどうでも良い。

魔竜スィーピュアの中身が元人間であり、ルウルヴィルウの慕う魔竜ではないことをまず知らせ、その上で協力を仰がねばならない。俺は意を決し、彼女(?)に語りかけようとして――、

「あ、そういえばスィーピュア様のためにわたくし腕によりをかけて料理を作りましたの！」

「……あの、俺は実はにんげ……って、え、料理？」

「はい！ 昨日は活きの良い馬鹿人間が手に入りましたので、じゃーん！」

ルウルヴィルウがその短い腕で指さした先には。

頭と。

胴と。

腰とを。

見事に引き裂かれた上で、

岩の槍に串刺しにされ、

紫炎で炙られかなり良い塩梅に焼けている、

「お、俺の体があああああああああっ!？」

元人間の俺の体があった。

第2章 魔竜出逢う（後書き）

登場人物（登場竜）

【紫炎の魔竜】スィーピュア

【碧空の飛竜】ルウルヴィルウ

この二体がメインで進むお話になりますね

折角なのでランキング登録してみました
もし宜しければどうぞ投票お願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4420/>

紫炎の魔竜

2010年10月8日21時46分発行